

宗教儀式、宣教行為、そして一致の象徴
—— I コリントにおける「主の晩餐」再考 ——

大坂太郎

序

「聖餐論」とグーグルで検索をかけるとオートコンプリートで出てくるのは何と「聖餐論争」である。勿論狭義における「聖餐論争」の端緒となったのは1529年のマールブルグ会談における「これはわたしのからだ(血)である」を巡るルターとツウィングリの見解の相違にはじまる一連の事件を指すのであろうが¹、聖餐を巡る論争は現代日本のキリスト教界を揺るがす大きな問題となっている。一方では日本基督教団においては2000年代頃からそこに所属する保守的な教会(教会派、伝道派とも言われる)から「聖餐のみだれ」、つまり洗礼の有無、より正確に言えばキリスト教信仰の有無に関らず参加者が聖餐に自由にあずかれるように聖餐を執行する(フリー聖餐)教会があることが指摘され、その流れの中で2007年の第35総会において上記のような形で聖餐式を執行している北村慈郎牧師の教師退任勧告決議案が可決され、さらに2010年1月には日本基督教団初の免職処分となったことは記憶に新しい。他方で現在東京、大阪などでダイナミックな信徒の数的増加を見せているオーストラリア・アッセンブリーズ・オブ・ゴッドに所属する宣教師によって主導されているペンテコ

¹ 東野尚志、「カルヴァン『信仰の手引き』を読む」その22『雪ノ下通信 ONLINE』
<http://www.yukinoshita.or.jp/tsuushin/k9906.htm>

ステ派のジーザスライフハウスではライブハウスでそれぞれの食べ物を手に持って祈り「かんぱ〜い!! って、ジーザスに感謝☆(原文ママ)」をするというカジュアルな聖餐式をもったり²、今年の初めにはなんと日本式におにぎり味噌汁を食べてみんなで聖餐式を祝おうという企画がなされ、そこには新しい人がいた旨が記されており、ピースサインの男女がにこやかに写真にうつっている³など聖餐式をめぐる理解は加速度的に複雑化しているようである。

このような状況下において「聖餐」を語ることは大胆な試みである。だが混乱した牧会状況の中で真理を模索し、それを語ることは実に新約聖書的な営みであるともいえる。なぜならどのように保守的な霊感論を取るにせよ新約諸文書、ことにパウロ書簡が第一世紀における初期キリスト教運動の個別かつ多様な「状況」に向かって語られた「状況文書」であることは厳然たる歴史的事実だからである。言うまでもなくパウロが直面した「聖餐のみだれ」は今日我々が直面しているそれとは異なるところが数多くある。しかしながらその文脈における固有な状況に肉薄していくとき、実にそこから今日的課題に対する示唆が見えてくるのである。

本小論において筆者は聖餐論についての言及が見られる1コリント8、10、そして11章を取り上げて釈義的研究を行う。具体的にはコリント教会における「主の晩餐のみだれ」に果敢に立ち向かった使徒パウロの言述を排他的宗教儀式、宣教行為、そして参加者に霊的一致をもたらす象徴行為という三つに分類して考察をする。そして結論部分においてこれらの知見から得られたものを総合し、聖餐にゆれる現代日本のキリスト教界に対して一定の提言を行うものである。

² ジーザスライフハウス大阪チャーチ！ブログ

<http://izumisydney.cocolog-nifty.com/blog/2008/12/post-bcda.html>

³ ジーザスライフハウス大阪チャーチ！ブログ

<http://izumisydney.cocolog-nifty.com/blog/2011/01/post-f5b0.html>。勿論ここにはイエスが十字架にかかってくれたこと、復活したことを思い出して、イエスがしてくれたことに感謝します、という伝統的な教会との連続性も保持されているが、基本基調は聖餐式を「祝う」という表現であることに筆者は着目している。

I. 排他的宗教儀式としての「主の晩餐」

A. 「偶像の神殿での食事」と「市場で売っている肉」の区分

第一義的には1コリント8-10章は主の晩餐を取り扱っている段落ではない。むしろパウロが取り扱っているのは偶像に捧げた肉について(Περὶ δὲ τῶν εἰδωλοθύτων)であった(8:1)。しかし8-10章を精読するとパウロの偶像に捧げた肉を食べることについての態度は簡単に黑白をつけられるものでもない。というのはその答えは複数の異なる状況によって変化しているからである。パウロは「すべて市場に売っている肉(Πάν τὸ ἐν μακέλλῳ πωλούμενον)」(10:25)、「信仰のないものに招待されて」(10:27)という表現を用いて、肉がどこで供されるかということに着目している。つまり当該箇所においては①キリスト者が偶像神の祝宴に参加し、そこで飲食をするというケース(8:1-14; 10:14-22)、②かつて異教徒の手を通り、異教の神に供えられた肉が市場で売られているケース(10:25,26)、そして③信徒が未信者の家の食事に招かれた場合(10:27-31)の3つのことなるケースが想定され、それぞれに独立した答えがあるということがわかるのである⁴。

B. 偶像の神殿で「偶像に捧げられた肉を食べるべきでない」2つの理由

まずキリスト者が偶像神の神殿において偶像に捧げられた肉を食べるかどうかという事例においては、パウロは2つの理由からこれを拒否している。まず8:4-13においてであるが、パウロはまず8:1-3において自らが問題を解く根本的な鍵が知識ではなく愛であることを説き、続く4-6節において8:1と同様「わたしたちは」と一人称複数を用いて、コリント教会で恐らく問題行動を起こしていた信徒たちと基本理解を共有していることを述べている⁵。その理解とは、世にいうところの偶像の神は実在せず(8:4)、全てのものは父なる唯一の神から出、唯一の主なるイエス・キリストによって存在する(8:6)ということである。しかしながら、この同じ知識を共有しながらもコリント教会の

⁴ L.モリス、『コリント人への手紙第1(ティンダル聖書注解)』村井優人訳、(いのちのことば社、2008年)145頁。

⁵ G.D.Fee, *1 Corinthians* NICNT (Grand Rapids: Eerdmans, 1991) 370.

一部がとった選択と使徒パウロの選択は全く正反対であった。というのもコリント教会の中のある人々はこの「知識」を根拠にして、こともなげに偶像の宮での祭儀的食事に加わっていた。対してパウロは一方では偶像なるものは存在しないという理解をコリント教会のクリスチャンたちと共有しながらも、自らは偶像に捧げた肉を今後いっさい食べることをしないと強烈な否定をしている⁶。というのも若しそのことをすれば確実に同じ教会の中の弱い兄弟たちの良心が汚され(8:7)、つまりきを与え、更には偶像の神殿での食事はこの弱者たちに悪い教育的効果を与え、彼らを救いではなく滅びに至らしめてしまうからである⁷。つまり唯一神に対する知識は正しくとも、その適用において教会における弱者への愛を欠くならば、その結果はその人を高ぶらせるばかりか、信徒を滅びに向かわせることになってしまうという事態が実際にコリント教会には起こっていたのである⁸。

そのような未消化で断片的な知識を乱用することによって信徒を躓かせている、自らは知者を自称するコリント教会の信徒に対して、パウロは自身の見解を明瞭に述べる。使徒パウロの人生の目的は愛をもって福音を宣揚することにより主のからだなる教会を建立することであったから、コリント教会の人々が愛を行動の中心に置かず、信徒をつまずかせることは看過できないことであった。これらのことを総合するとここでパウロが偶像に捧げられた肉を食べるべきではないと結論づけた第一の理由は弱い兄弟たちを躓かせてはならないという牧会上の倫理的な要請があったからだだと結論付けることができる。

しかしなぜパウロは自らも実体がないと認める偶像の神殿の中で食事をするのが信徒を永遠の「滅び」へ至らせると考えたのだろうか。その理由は10:14以下に明瞭にされている。10:1からのセクションにおいてパウロはコリン

⁶ 原文では οὐ μὴ φάγω κρέα εἰς τὸν αἰῶνα, と否定辞を2つ重ね、接続法を用いる強力な否定形が用いられている。

⁷ この「滅び」(ἀπόλλυμι)という語はパウロ書簡ではいつも永遠の滅びを指すものである。Fee, *I Corinthians*, 387 参照。だがブルースはこれに反対している(モリス, 153頁)。

⁸ Feeは10節は原文では ἰάν + 接続法の形、即ち一般的な仮定の形でかかれてはいるものの、議論の緊急性などから考えると単なる仮定と言うよりも現実的に発生していることを取り扱っていると考えている。

ト教会への教訓としてこの主題を補強するために出エジプトの物語をアレゴリカルに語るのだが、そこには血肉によるイスラエルが神のイスラエルである教会(ガラテヤ6:16)がもつ2つの象徴、即ちバプテスマ(10:2)と聖餐(10:3,4)の雛形ともいえる体験をしていたことが述べられている。しかしそのような恵みの体験をしながらも、彼らの大部分はむさぼり(10:6)、偶像崇拜(10:7)、主を試みたこと(10:9)、そしてつぶやき(10:10)のゆえに滅ぼされたパウロは主張する。これら一連の背信行為のなかでコリント教会と最も深い関係があるのは偶像礼拝の問題であった。そこでパウロは主の晩餐に与ったものが、偶像に捧げられたものを飲食することは悪霊の食卓に与ることになる、つまり偶像礼拝を行ったことに等しくなるのだからそれをやめるようにと強く警告しているのだ。

コリントのクリスチャンのあるものは自らを「思慮分別のあるもの(φρονίμος)」と自称し、神はお一人であり、偶像などはない、またそもそも私はキリストにあって自由なのだからどこで何を食べてもかまわないという一種の「合理化」を行い、偶像の宮でよく行われていた宗教的であり、且つ社会的な食事¹⁰をクリスチャンになってからも異教徒たちと共にしていたようである。それに対してパウロは異教の神殿での飲食は主の食卓が主と共同体を結ぶ宗教的な儀式であるように、悪霊に捧げられたものを共に食する宗教的な儀式なのだから、とりもなおさずそれは偶像礼拝であり、その結果は主のねたみを引き起こすからそれは忌むべきタブーなのだと言っているのである。

上記のことを総合すると、当該文脈における主の晩餐の言及は、その主要な目的は偶像礼拝との類似を示すために用いられているのではあるが、これは逆説的にはあるが主の晩餐が主に連なるもののために設立された儀式的食事であり、誰でもそこに与れるというものではないという排他的性格を持つことを示しているとも言える。

⁹ R.B.ヘイズ、『コリント人への手紙1』 焼山満里子訳、(日本基督教団出版局、2002年)、273頁。

¹⁰ Fee, *I Corinthians*, 361.

C. 市場で売られている肉と未信者の家に招かれた場合に肉を食べるべきではない例外的理由

以上の討論を終えたパウロは 10:23 以降において実際的な結論を導き出す。まずパウロは大原則を提示する。それは「すべて市場で売っている肉は調べ上げずに食べてもよい」というものである。というのも当時店頭で売られていた肉のほとんどは最初は何らかの神に供えられたものであったという事実があったから¹¹、そのことを過剰に詮索するときりがないからである。次にパウロは未信者の家に招かれて食事をするときも何でも食べてよい (10:27) とする。だが、ここでパウロは一つの例外的事例を挙げる。それがもし異教徒の食事の席に招かれたときに、誰かが「これは若しや偶像に捧げた肉ではないか」と詮索し、それを気にしている場合はたとえそれを飲み食いすることが偶像礼拝になることはないにせよ、忠告してくれたその人を「つまずかせない」ために食べてはいけないのである。端的に言えば、パウロは全ての信徒を立て上げるために、愛を持って、神の栄光のために全てを行い、時には自己放棄をもいとわずそれをするよう指導したのである¹²。

D. まとめ

上記のことを総合し、特に 10:1 以下の出エジプトとの類比から考えると当該文脈においてはパウロが主の晩餐をバプテスマを受け、神との契約的關係に入ったもののみが受ける排他的宗教的儀式として、またそれを通して一つキリストのからだにあずかる、聖徒の交わりをもたらすものとして理解していたことは明瞭に結論付けられる。

¹¹ モリス、前掲書 144 頁。

¹² モリスは 9 章は一見すると 8、10 章と違う主題を取り扱っているように思えるので、この章を他の手紙からの挿入だという仮説を使って説明する学者がいるが、そういった仮説を立てなくても 8-10 章を統一的に読むことは可能であると考えている。(モリス、155 頁) つまりパウロはここで自分の使徒である権利と、福音のゆえにそれを「行使しない」自由によりながら生きていくことを教えることにより、10 章の結論を暗示しているのである。

II. 宣教的行為としての「主の晩餐」

A. 主の死を告知させる「主の晩餐」

パウロはルカと共通の伝承を用いて主が聖餐式を制定した目的を「私を想起するため (εις την ἐμὴν ἀνάμνησιν)」と述べているのだが、では人にキリストを思い起こさせる「よすが」となるのは何だろうか。26 節には「ですから、あなたがたは、このパンを食べ、この杯を飲むたびに、主が来られるまで、主の死を告知させるのです (11:26)」と書かれていることから、ある学者たち (Weiss など) はここでの「告知させる (καταγγέλλω)」はパンを裂き杯を飲むというドラマチックなアクションによってのみ (傍点は筆者) なされるものだと考えている¹³。しかしながらそれは早計である。というのもパウロ書簡においてこの動詞は当該の箇所を含めて 7 回用いられているが (ロマ 1:8、1 コリ 2:1、9:14、11:26、ピリ 1:17,18、コロ 1:28) 当該箇所以外ではすべて口頭での福音の告知が前提されていることが明らかであり¹⁴、更にこの直接の文脈においてもイエス自身がパンを裂き、杯を取るときに「ことば」を発していることから考えても、これはむしろ「言葉」と「行為」が不可分に結びついた典礼全体が「宣べ伝える行為」として機能していると解釈するほうが妥当であろう。芳賀はアウグスティヌスが洗礼の水について語った有名なことば「水という素材にことばが加えられて秘蹟となる」また「ことばから水を取り去ってみなさい。そうすれば水はただの水以外のなんであろうか」を引用し同じことがパンとぶどう酒にも当てはまると述べているが¹⁵、確かにこの箇所においてはそのような「ことば」と「行い」の平行関係が認められる¹⁶。

¹³ H. Conzelmann, *1 Corinthians* trans. by J. W. Leitch Hermeneia (Philadelphia: Fortress, 1975) 201. n.100. Fee, *1 Corinthians*, 557.

¹⁴ モリス、前掲書 194 頁。

¹⁵ 芳賀力、『洗礼から聖餐へ』(キリスト新聞社、2006) 133 頁。

¹⁶ 大崎は「神の自由な恩寵行為は現実の人間、人間の全体に、真に有効にかかわるという深い福音認識に基づいているのである。こうして説教と聖礼典は、互いに堅く結び合い、且つまたそれぞれに課せられた務めを果たすことによって、神の今日における自己啓示の業に奉仕する」と述べ、説教と聖礼典の不可分性について語っているが、興味深い見解である。参考、大崎節郎、「改革派教会における